

加藤清正の実像



文禄5年(1596)9月、大坂における明国勅使との講和交渉が決裂し、秀吉は諸大名に朝鮮再出兵の準備を命じます。これにより、いわゆる慶長の役と呼ばれる戦いが開始され、清正は再び朝鮮半島へ渡ります。

〈16〉蔚山城の籠城戦

文禄5年(10月に慶長に改元)11月上旬に熊本を出発した清正は、名護屋を経て翌慶長2年正月13日に釜山浦の西に位置する多大浦に上陸します。その後すぐに自身の居城である西生浦城に移り、朝鮮への再侵攻に備えて城郭の強化・修築に取り掛かります。同年2月21日に秀吉は再派兵の陣立てを整え、清正は10,000人の軍勢を率いて西生浦城の在番を命じられました。また、この陣立てで清正は先手に配置され、進撃に際しては先陣を務めることになっていました。ここでも清正軍は、文禄の役の時と同様に日本軍の主力部隊として位置付けられました。

同年7月、毛利秀元を大将とする右軍は清正を先鋒として進撃を開始。秀吉が命じた赤国(全羅道)の領土確保を目指し、西に向かいます。途中8月14日から16日かけて、慶尚道・全羅道の道境に位置する黄石山城を落とし、同月下旬に全州に至り、小西行长率いる左軍と合流します。そこで両軍話し合いが持たれ、清正軍は忠清道への侵攻のため北上して清州方面へ進むこととなります。忠清道をひと通り転戦し、ある程度制圧したという名分を立てた清正軍は、慶尚道南岸地域に拠点移して、そこを固めよという秀吉の命令に従うかたちで南下し、10月8日に蔚山に入ります。その直後から清正は浅野幸長や毛利家家臣の穴戸元統らと共同で蔚山城の築城に着手します。普請の大部分は浅野・毛利勢が担い、急ピッチで進められた結果、2か月程でほぼ完成したようです。史料によると当時の蔚山城は、周囲2.7kmの惣構に濠と土手を巡らし、最大13mの高さを持つ石垣の総延長は1.4km、堀の総延長は1.8km、本丸、二の丸、三の丸に大小12の櫓を備える本格的な城郭規模でした。しかし、この突貫工事で進められた蔚山城普請には、日本と朝鮮の民衆が大勢酷使され、厳しい寒さと過酷な労働のため逃亡する者が続出しました。

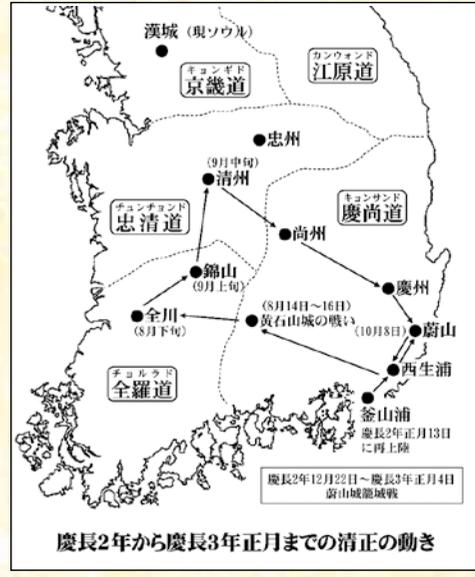
さて、蔚山城完成が目前に迫った12月22日、明・朝鮮の連合軍数十万人が蔚山城を取り囲み、23日には惣構に迫る勢いで攻め寄せます。この時、蔚山から南へ約15km離れた西生浦城にいた清正は大軍襲来の報告を受け、ただちに蔚山へ向かい22日の

夜には蔚山城へ入ります。敵軍が迫る最中の23日に、城普請を担当した浅野幸長から正式に蔚山城を受け取り、清正が守備の指揮を執ります。年が明けて慶長3年正月3日深夜から翌日朝方にかけて総攻撃を受けますが、なんとかこれをしのぎ、4日には毛利秀元らの救援部隊が到着して昼前ようやく敵軍は撤退します。一時は降伏や死をも覚悟するほど極限状況に追い込まれた清正は、この救援によって人生最大のピンチを乗り切り、まさに九死に一生を得たと言えます。

この戦いで30万人の明・朝鮮軍が襲来して、このうち数万人を討ち取ったと清正は秀吉に報告しています。この数字が多少誇張されたものであるにしても、普請途中の蔚山城には十分な水や兵糧が備えられておらず、戦死者以外にもおびただしい数の餓死者・凍死者を出すなど、朝鮮出兵で繰り広げられた戦いの中で最も凄惨を極めた籠城戦でした。清正が日本への報告の中で「あわれな現場の状況を一度見ていただきたい」と力なく述べていることから、この籠城戦がいかに熾烈で悲惨なものだったのかがうかがえます。

この時清正は数え年で37歳。7年間にわたる朝鮮出兵も慶長3年8月18日の秀吉の死を契機としてようやく終息に向かいます。

※蔚山広域市
世界的自動車メーカー・現代自動車の主力工場や国内最大の石油コンビナート・SKエナジーなど巨大企業を擁する人口110万人の韓国随一の工業都市・蔚山広域市。清正が籠城した蔚山城や本市に蔚山町という旧町名が残るなど、歴史的関わりが深い両市は、平成22年(2010)4月26日に友好協力都市協定を締結し、様々な分野で交流と協力を進めています。



慶長2年から慶長3年正月までの清正の動き